る、佛の本願はあらゆる衆生をして速得成佛の益を得せしめるために淨土往生の教を說かれたから、凡夫も菩薩もその益に預ることは同じであるが、凡夫は先づ三界の輪轉より免れやうとして往生するのに對し菩薩は修行の任運無功用なる達成を望むために往生し、且つ願生心に於ても凡夫は實の生死ありとするのに對し菩薩は生の無生を知つて願生するとみた。往生すれば凡夫の生見は轉じて無生智とならしめられるといふが、ともかく願生者に凡夫と聖人の別あるをみたのは曇鸞に始まる。(d)次いで道綽は淨土が凡聖通往の國なるを力說し、佛願に由るから凡夫も菩薩も皆生ずることができるとした。然し凡夫は相善を以て相土に生じ聖人が生ずる無相土とは別なりとみたから、たとひ淨土が相土と無相土とに通じ相土から後に無相土へ轉生せしめられるとしても、一往は凡聖の別に從つて淨土に有相無相の異を立てたことになる。且つ菩薩の中でも、往生を願ふものは新發意の菩薩であるとしてゐることが注意されやう。(e)迦才は道綽の說を承けて西方に法報化三身の淨土ありとし、その中で凡夫は化土に生じ聖人は報土に生ずると明言した。然し菩薩にして願生するものは十解以下の初心のものであり、觀經及び大經四十八願によれば五濁の凡夫が淨土教當面の目標であるから、淨土宗の意は正爲凡夫兼爲聖人と云はねばならぬと主張した。(f)善導が理證（―信念―）と教證の上から淨土教は偏へに凡夫のためであつて聖人のためでなく、佛の願力に由るが故に凡夫が報土へ往生すると說くやうになつたのは、この迦才の信念を徹底せしめたものである。尙やはり要旨ではあるが稍詳細なものを印度學佛教學研究第六號に載せた。併せて參照されたい。

蒙古佛教の實態調査

春日禮智

蒙古の佛教は、印度佛教が婆羅門教學と徒合して出來た密教が西藏に入つて西藏佛教となり、その西藏佛教が西藏固有の民族信仰ボン教を取り入れて印度の密教と異つた新しい西藏の密教――喇嘛教に姿を變えて行つたのであるが、蒙古佛教はその西藏佛教をそのまま直譯的に輸入したものとされているが、實は此亦蒙古の民族信仰シャーマン教を包含することに依つて出來上つた特異の佛教の一支流でもあつた。この宗教も亦西藏と同じくラマ教と呼ばれているが、どうしてこの宗教が今日すべての蒙古人の生活を指導するようになつたかと言えば、その蒙古傳來以來元朝淸朝の超常識的被護と、蒙古人の絶對的歸依に依つて生じた莫大の寺領寺產が、蒙古人の經濟的政治的、そしてあらゆる文化的社會的生活を支配するに至つて、益々その强固の度を加えたものである。この佛教には色々の特長がある。西藏の佛教も支那佛教を多分に採り入れているが、蒙古の佛教もその廟の構造に依つて支那式西藏式そしてその中間的要素を持つた蒙古式の三通りに分類することができる。それが廟、ジャオ(召)、スムの名で代表されているとも見ることができる。蒙古には活佛という、佛、菩薩、聖者の轉生者――フビルガンという生き佛が澤山いる。これは佛種不斷の佛教精神の顯現である。蒙古の佛教

界には本山というものがなく、宗派と言つてもラマ教黄教派一本槍で、舊教である紅教派は殆んどないので、その點教界は極めて平穩である。本山の代りに喇嘛印務處というのがあつて、内蒙第一の格式を誇るドロンノールの廟がその掌印札薩克ラマであるが、疆内の寺廟を末寺として統轄する權利はない。主な廟には大抵ラッサンと呼ばれる學部があり、それにチョイリ（顯教學部）ジュドワ（密教學部）マンバ（醫學部）デンホル（時輪教學部）の四ラッサンがある。この四つの揃つているところは少く、その外ラムリム・ラッサンのあるところもある。五當召廣覺寺はこの学部の最も完備した内蒙一の学問寺である。ラマの最も多い寺は貝子廟で、ここには九百名のラマが居り、ラマ廟の壯麗なる偉觀は草原に於ける蜃氣樓のように美しい。昔はラマは蒙古のすべての男子の半分以上もいたし、その寺領は王侯の領分と共に、殆んど全蒙古の土地を掌握していたといわれる位で、蒙古の住民はそのシャビナル――家來で信者だから、ラマは生殺與奪の權を握つていた。

蒙古人の信仰は殆んど狂信的で、實に敬虔そのものである。念佛としてオム・マニ・パド・メ・フーンの觀音信仰の眞言を唱える。その思想は般若系で、輪廻轉生を深く信じ、彌勒の淨土シャンバラの出現を信じ、そこへ往生することを無上の誓願としている。信仰對象としては色々あるが、歡喜佛は我々人間に最も有力な佛緣ある佛であるが、我々日本人が考えているように、婬猥だとは彼等は考えていない。それは大樂を超脱した無欲の象徴である。

鎌倉幕府に於ける落雷事件について

寺西惠然

鎌倉幕府に於ける寛喜二年六月十四日の落雷事件に就ての大評議が吾妻鏡に記るされて居る。

十四日甲戌。風雨甚シ。相州。武州。武州ニ被参御所ニ著西廊ニ給。助教師員隱岐入道行西。駿河前司義村　民部大夫入道行然。加賀守康俊。彈正忠季氏等候ニ其砌ニ。依ニ去九日雷事ニ。可下令レ避ニ御所ニ給上否。將又被レ行ニ御占ニ就ニ吉凶ニ

以下長文がつづられ文章は可なり澁滯して居るが、この文に依つて落雷の吉凶が重大事となつて居ることが判明する。其の爲め幕府の要人が長時間を費して評議をして居るのである。相州は北條時房であり武州は同泰時で助教は所謂陰陽寮の事務官で長官頭教に從ふ次官である。次に幕府要人の入道行然は嘗つて聖覺法印を鎌倉に招聘し又鹿嶋神宮へ一切經を奉納した奉行で佛教厚信の人物である。康俊は三善善信の息で幕府の文官である。此等數多の人々に依つて落雷は吉か凶かの大論戰を行い引いて落雷の場所は如何にすべきか凶ならば其所の建造物は撤去して他に轉ずべきであると甲論乙駁し先例の穿鑿にまで及び季氏は醍醐帝の時、清涼殿に落雷し大納言清貫、中辨希世が雷火に燒死したと表現すると行西はそれは不吉なりと斷定して居る。それに對し助教は數多い關東武士に左袒し頼朝奥州攻略の時、陣中に落雷し又承久兵亂の時、義朝の釜殿にも雷落ちしも何れも皆な吉